



# 「本と人と」から「本を未来へ」

市立小諸図書館専属ルリユールおじさん

今成 欣也さん(74歳) 軽井沢町

## ル

ルリユールとはフランス語で「製本や装丁をする職人」のこと。今成欣也さんによれば「日本には木簡から巻物、和綴じ本への長い歴史があった。和綴じには職人の技は必ずしも必要でなく、明治時代に洋装本が入ってきたもののルリユールの文化は育たなかった」という。

## 今

成さんは埼玉県立図書館で33年間司書を務め、退職後に軽井沢町に移住した。小諸図書館の蔵書修理ボランティアを始めて12年になる。本の修理のほか、薄い雑誌が散逸しないように合本にして

## 司

まとも製本する作業なども行っている。市民講座で製本を教えた受講者6人とともに「製本サークル・ルリユール」を作って、修理ボランティアや趣味の豆本作りを楽しんでいる。

書の仕事について今成さんは「蔵書を頭に入

れなくてはならない」という。多くの本に当たって読むこと、目次を読むだけでもいいと話す。働きながら工業高校へ通い、数々のアルバイトをしながら独力で大学の文学部を卒業した豊富な経験は、この仕事の助けになったに違いない。

## 手

司書の役目は「本と人とを結びつけることだった」と今成さんは思っている。

先の器用な今成さんは、司

## 最

書時代に本の修理を始めた。解説書はあったが、本を分解するなどして研究したほぼ自己流。当時は「窓際族のすることだ」というイメージがあるのか、あまり評価されなかった。そうだが、小諸図書館のあるスタッフは「日常の業務に追われて、とても本の修理まで手が回らない。本の手入れは破損のチェックや消臭・消毒までで手一杯。今成さんが神様に思えてくる」と言う。

近の本は糸で綴じない「無線綴じ」が多く、製本の際のわずかなズレによって頁が抜け落ちやすい。絶版になるのが早く、壊れても買い替えられないことがある。

ハードカバーの全集にある作品でも、活字の大きい文庫本で読むことが好まれる。「製本サークル・ルリユール」の活動への期待が大きい。

## 戦

後の一時期に作られた本は紙の質が悪く、ま

## ル

ルリユールおじさん」という絵本が出版されて、ルリユールという仕事幅広く知られるきっかけになった。本の中にこんな文がある。「本には大事な知識や物語や人生や歴史がいっぱい詰まっている。それらをわすれられないように、未来にむかって伝えていくのがルリユールの仕事なんだ。」

## 製

本サークル・ルリユールでは仲間を募集している。絵本『ルリユールおじさん』(いせ ひでこ・作)は小諸図書館にある。

(取材・文 佐藤 万千子)

ゆらさんの四季の薬膳  
「おじさん」の難題

ほどほど…これが案外難しく、特に何かがからだにいいと聞くと、そればかり食べてしまうのが人情。しかし、中医学にはひとつのことに偏らず、中庸を貫くという考え方があります。つまり、どんなに効果的な食物でも、食べすぎは逆に毒になるといいます。量はほどほどに、長く続けることが大切なのです。晩秋の味といえば、種実類。くるみや栗、銀杏など数ある中で、今回はくるみを取り上げてみます。種実類は全般的に老化防止に効果があります。が、くるみは胡桃肉の名前で生薬としても使われています。腰痛や呼吸困難、便秘の薬なのです。くるみにはからだを温める作用があり、腰痛や頻尿、便秘、足腰の衰え、肌荒れ、慢性の咳や喘息にも効果的。さらに「排石」といい、尿路結石を排出する力も発揮する縁の下の力持ち。

とはいえ、リノール酸の過剰摂取が問題になっており、食べすぎは禁物。食物効果は、ほどほどを守ってこそ。

(国際中医薬膳師 小清水由良)